小学校音楽科教育法
表現「ふしづくりの教育」に関する考察（１）
－山崎俊宏の著書及び研究報告書等をとおして－

Elementary School Music Department Method of Education Consideration (1) about Expression ‘Fusizukuri Education’
－ Through a Book of Toshihiro Yamazaki and Working Papers －

（2017年３月31日受理）

小野　文子　　太田　正清
Ayako Ono　　Masakiyo Ohta

Key words：小学校音楽科教育法，表現，ふしづくりの教育，山崎俊宏，中家一郎

要　　旨

昭和40年代「ふしづくりの教育」を実践研究し，全児童の音楽学習能力を伸長させたのは，岐阜県吉城郡古川町立古川小学校長であった中家一郎と音楽主任であった山崎俊宏を中心とした全教員であった。当時の岐阜県において，古川小学校は24クラスの大規模小学校であった。明治以降ひとつの小学校において，何年間も全担任が音楽科の授業研究を続けた大規模小学校は古川をおいて他にないであろう。筆者は，2017年１月16日，17日古川町に山崎を訪ね，ご本人より当時の話を伺うと同時に山崎の書き残した多くの資料を頂いた。本研究は，山崎から伺った「ふしづくりの教育」に関する研究にまつわる話と関係書籍・資料等から構成した。

Ⅰ．は　じ　め　に

「ふしづくりの教育」が可能となったのは，昭和40年代，古川小学校校長であった中家一郎[1)]の教育観と山崎俊宏をリーダーとした教師集団が“音楽学習能力”を児童自らが身に付けることを目指した実践研究にあった。

Ⅱ．古川小学校長中家一郎の略歴

中家一郎は，現在の飛騨市古川町に誕生した。中家は昭和４年に古川尋常高等小学校を卒業，岐阜師範を経て，高山南尋常高等小学校に赴任した。昭和11年には教職を辞し，岐阜師範学校専攻科に入学。翌12年専攻科を修了。高山西尋常高等小学校に赴任した。昭和17年，古川国民学校に転勤し，10年間勤務した。昭和27年，教頭として国府中学校に転勤した。昭和29年から２年間，飛騨教育事務所指導主事を勤めた。中家は，昭和31年，国府村立老和気小学校長に，昭和37年，河合中学校長となった。

その後，中家は昭和38年に飛騨教育事務所指導課長に転出した。実は，昭和41年の岐阜県の小学校音楽科の研究指定校が古川小学校に決定したのも次のような経緯があった。当時中家は飛騨教育事務所の課長を務めていた。

ある日，岐阜県教育員会の音楽担当指導主事をしていた山本弘[2)]から，「小学校において音楽科教育の研究を担当してもらえるところはないものだろうか」と話を持ち掛けられた。中家は「古川小学校がよいのではなかろうか」と返事しておいた。

中家は昭和42年，自らが推薦した古川小学校へ校長として赴任することとなった。

中家は自身が退職する昭和50年３月まで「ふしづくりの教育」を支えた。

Ⅲ．古川小学校音楽科主任山崎俊宏の略歴

山崎俊宏[3)]は昭和４年に現在の高山市国府町に誕生した。岐阜県の教員養成所を卒業後，日本大学文理学部２年課程を修了後さらに武蔵野音楽大学で聴講生として２年間学んだ。昭和26年に大村小学校に赴任し，昭和29年に宇津江小学校に転任した。その後昭和37年から古川小学校に勤務した。昭和41年に古川小学校は岐阜県教育委員会から研究指定を受けた当時は，音楽の専科教員はいなく，山崎音楽主任が中心となり，「ふしづくりの教育」の実践を推進した。

山崎は，昭和49年に飛騨教育事務所音楽指導主事となったが，昭和51年には，再び古川小学校へ教頭として帰って来た。

山崎は，昭和52年10月に，「ふしづくりの教育」に対する長年の功績を評価され，第８回中日教育賞「ふしづくり音楽教育の推進」を受賞した。

山崎は，昭和54年から，本郷中学校，神岡中学校，国府中学校の教頭を歴任，昭和62年３月に定年退職した。

その後，平成元年から平成４年まで，国府町教育委員長を務めた。

Ⅳ．中家一郎の教育観

筆者は，山崎から「昭和47年４月６日付けの　第１回職員会（現在の職員会議）」の中家手書きの配布文書（ガリ版印刷の教育方針）を頂いた。そこの一部分に次のようなことが記されていた。

１．本校の教育目標

主体的で創造的な学習態度の育成

・ひとりひとりの児童が自分の立場で受けとめて，学習にとり組む姿勢をつくる。
・基礎学力の充実をはかり，その錬磨につとめる。
・総合的な知識を重視し，巾の広い思考力・判断力・実践力を育てる。

また，このガリ版りずりの中家手書きの文書の中には次のことまで記されていた。

○教師として

① 職員は，先生30人，校務員２人，給食婦５人，皆が助け合って仲よくすること。
② 教師としての対面を保ち，児童，父兄から信頼される人間であること。
③ 児童を差別することなく，ひとりひとりを大切にすること。
④ 言葉使いに注意し，授業中も適当な音声であること。品位が大切である。
⑤ 公務上知り得た秘密は遺漏してなならないこと。
⑥ 児童に体罰を与えてはならないこと。
⑦ 一滴でも酒を呑んだ時は，車を運転してはならない。
⑧ 児童に事故のあった時は，敏速なる処置をとること。
⑨ 学年主任,各種委員は学年の連絡をよくすること。
⑩ 来賓には親切にすること。
⑪ 健康に注意して，児童に迷惑をかけないこと。
⑫ 教師は常に若々しく活動的であること。
⑬ 不平や不満のある場合は教務主任，教頭，又は校長に申し出ること。
⑭ 教師は子どもの先生であると同時に父母の先生でもある。従って教師は高い知性と深い見識を持っていなければならぬ。
⑮ 教師は専門職である。専門職とは子どもを教えるだけの知識を持っているというだけではない。

○児童に対して

① 子どもを可愛がること。可愛がるとは，正しい人格形成をはかり，能力を充分伸ばしてやることである。
② 子どもの人格をきずつけるような言動はつつしむべきである。
③ 悪い点は，やり直しをやらせることで，叱ってやらせてはいけない。
④ 父兄と常に連絡を密にし，子どもの実態に立って指導すること。
⑤ 子どもの健康に注意し，クラス全体として注意を要する時は速く連絡すること。
⑥ 子どもの学習や生活指導については，毎日注意し積み重ねと週間づけること。
⑦ 子どもはすばらしい可能性を持っている。その可能性を充分引き出して身に付けさせること。

この部分だけからも中家のねらいが“ひとりひとりの

児童のもつ可能性を伸長させること”にあることが充分に伺える。

V．中家一郎の音楽教育観

中家一郎は山崎俊宏編著「ほんものの音楽教育を求めて」の巻頭言で次のように述べている。

子どもはどんな子でもみんなが鋭くて新鮮な音楽的感覚を持っているのに，雲か霧に覆われたごとく，漠然として持ち合わせている可能性が充分発揮されていないと思います。その問題点を追求して何とか音楽教育の改善をはかり，子どもの可能性を引き出してやりたいという教育的情熱から，この問題の研究に取り組んだのが山崎先生であります。

児童に実践しながら改善に改善を加え７回も８回も書き替えてできたのが「ふしづくり一本道」であって，決して単なる机上プランではありません。

それから数年間の音楽教育の歩みは全く古川小学校の児童の学習に対する構えをすっかり変えてしまいました。児童は楽しんで音楽の学習をするようになり，めきめきと音楽的能力が育ち，雲や霧がすっかり払いのけられて晴れた秋空のように子どもの瞳は澄み切って輝いてきました。

私は，どんな教科でも同じことですが，現場の教師は児童の雑然とした実態の中から，どうしたら学問的理論に近づけることができるかという実証的研究をすることが任務でもあり，最も尊いことだと思っています。

世の中には幾多の教育書があります。けれども教育実践をなし実証したことをまとめた研究書は極めて少ないと思います。たいていは学者の理論をどのように現場で具体化するかということで，現場の実態から研究して理論を打ち立てたものが現場教師から生まれないことは不思議なことであると思います。

この本に収録されていることは，山崎先生が苦難を続けて開拓していった数年間の実践記録であって，通して読んでみると，実に偉大な発見がなされていることに気づきます。これこそ「ほんものの音楽教育」であると思います。

私は，心から敬意を表すると同時にひとりでも多くこの本を読んで戴いて，ひとつには現場教師のあり方を考えるとともに音楽教育のあり方についても反省してほしいと念願しています。

Ⅵ．山崎俊宏の「ふしづくりの教育」に対する想い

山崎は昭和48年，自身が編著者なり発刊した「ほんものの音楽教育を求めて」のはじめの巻頭言で次のことを記している。『みんなの子どもをみんなの教師で』―ふしづくりの教育―　ひとりひとりが生き生きと　自分の音楽をするように・・・みんなでみんなの子どもを育てたい。また、次のように続けている。

昭和41年，42年と２か年にわたる県教委からの音楽の指定校を受け，現在まで遅々たる歩みですが，子どもらと共に，手を取り合って研究を続けてきました。

今振り返ってみますと数々の思い出が走馬燈の如くかけめぐって来ます。

音楽という教科に対する考え方が特殊なものであり，一部の堪能なる教師が指導すべきもであるという通念があった。しかしながら指定校の趣旨からいっても，一部の教師ばかりでなく，全部の先生が，みんなの子どもを育てるべきであるという願いにたち，受けることになった。

目の前が真っ黒の状態であり，何をどうしていくべきなのか，ほとほと困ってしまった。先進校の温知小，大井小の視察，学年の体制づくり，初めて音楽の授業をもたれた先生方は，「伴奏が弾けないから困る」と言われたので，教材の伴奏をテープに録音したり，先生が，子どもの前に立ちふさがった授業にならないようにするための工夫，ひとりひとりを見つめ能力を開発していくための手段として，「グループ学習は音楽では可能でないのか」「体育ではできるグループ学習が音楽ではできないだろうか」

私の信念である感覚優先の音楽授業のあり方・・・

と幾多の問題点があったが，ともかく手をつけたのが，「ふしづくりの実践」である。１年から６年まで「ふしづくり」は同時に出発した。しかし,先生方から「教材」と「ふしづくり」の二本立てでどうしても，教材が遅れるがどうしたものか。また，音楽委員会から「こうやれというレールを示して欲しい」などという声が，研究会

のたびに出され,何とかしなければと苦しい思いをした。誰も歩んだことのない道を切り開いて行く過程なのだ。教師だけのプラン（机上プラン）ではいけないので，子どもとともに歩みながらの研究なのではかどらない。しかし，県から田中一昭先生，山本弘先生，事務局より中村，山下両先生，毎月一回本校の職員と同じようなお気持ちでご指導いただきました。そのうちに真っ暗な中に「ポッ！」と光明を見出しつつ歩んだ。

第１年度は，県大会も一緒になっていたので，吉城郡として，どういう体制で県音大会をもつのか，これまた大変なことであった。授業者の決定，研究演奏，協力態勢など連日の会議,研究会と目まぐるしい毎日であった。初めての経験であり，運営していくための難しさは，研究内容以上のものがあった。途中授業者の急病で二人授業公開できなくなり，一週間前にピンチヒッターを出さなければならない。今でこそ誰でも授業していただけるが,当時はそんなわけにいかず,校長さんも心配顔であった。結局桑原先生とフリーであった私がすることとなり，どうにか過ごすことができた。その頃授業者と同じような研究を各学年で進めていたのがよかったと思った。
その間，研究を深めること，健康管理，対人関係といろいろな要素がうまくかみ合って，回転しなくてはいけないことと痛感した。

約半年も過ぎた頃，２,３年の先生から「うちのクラスの子どもの音楽に対する構えがかわってきた」「教材を覚えるのが速くなった」「笛やハーモニカをうまく吹くようになった」「楽しんで音楽をする子が多くなってきた」などという声が聞かれるようになった。

また，県の音能テストを実施したところ，音楽委員のクラスより他の先生のクラスの方がよく伸びていたことなどあり，どうにか，お互いに「この方向でいいんだ」ということが分かり，指導の先生が前から話されていたことが，どの先生にも理解してもらえるようになったと嬉しかった。

こんな時「ふしづくりだけ俺もやってみる」という先生もありどうにか二人で力を合わせて子どもを育てる態勢の第一歩を踏み出したのである。それまでの経過は，いばらのような道であった。そして，技能面での心配や発声，演奏技術という問題がよく話題になったが，今は音楽の骨組みを作っているんだからという考えで，あまり表現面には力を入れず，とにかく教材は，うたを覚えること，好きな速さで，好きな強弱で歌いこなすことに終始した。

二学期の終わる頃となり，どうしても模唱奏の段階前にリズムにのせる段が必要ではなかようか。○○○Ｖというリズムにのって，いろいろな遊びをを通してつかませること，流れに鋭敏に反応することが，もとになると考えた。そこで導入段階ということで模唱奏の前に，いくつかの段階を作った。あそびを通して活動する子どもらは，生き生きとした姿であり，特に低学年では，ことばを覚えていくのと同じように，模倣，選択，即興，再表現と，くりかえすいろいろな遊びの中で体験し，つみ上げていく事がだいじだと思った。そこに主体性も創造性も育ち得る源があると痛感した。

「ふしづくりの教育」が,常に子どもたちを選択,責任,のある立場においこんで自分も活動しなくてはならないので活動量も多くなる。したがって能力として定着してくる。するとおもしろくなる。このくりかえしで，毎日の内容が積み上げられてく。当然のことであり乍ら従来の音楽教育では考えつかなかったことである。

こううして１年も終わる頃部員で一年間に歩んだ道を整理することになり，それぞれの学年で同時に出発したけれど一年間に進められた所までの具体的内容と扱った時間数を記録して歩みをまとめた。やっとレールらしいものができたのである。

これは机上のプランではなく，実践した内容，年間の時数の中で扱えるもの，どこの学校でも初めて実践する時に使えるもので誰にでもできるものとしてまとめたものである。実に，いばらの道であった。

どこの指定校でもそうであると思うが，最初の1か年は本当に体制づくりと内容研究と両面の苦しみがあり大変である。本校のように職員が多い場合，いろいろな考えがあり，共通の理解を得る事は，なかかなむずかしく，幾度か暗しょうに乗り上げてしまった。しかしその度に指導の先生をはじめ，校長先生，先輩，同僚の先生方の指導を受け，少しずつ前進することができた。先生方の暖かい御指導，はげましのお言葉，本校の先生方の御協力と研究に対する意気込みなどいろいろ総合されて今日に至ったのである。

中家校長が，よく語っておられることばに，「教育と

は,ひとりひとりの子どもの持っている無限の可能性を,引っ張り出して育てることである・・・そのためには,人間尊重を基盤においた暖かい民主的な学級経営の上にこそ主体的な学習が成り立つものであること・・・」
教育の全てに通ずる理念のもとに，いつまでも灯の消えることなく「ふしづくりの教育」を深めていきたいと念願しています。

先生方と共に歩んだ道を，子どもの作品を眺めることによって，たとえそれが幼稚なものであっても，思い出の一頁としてご覧くださり，次への発展の資料ともなればうれしいことです。

Ⅶ．古川小学校における「ふしづくりの教育」の実践研究

昭和41・42年度岐阜県教育委員会より音楽教育研究校として指定を受ける。

主題は―創造性の開発をめざし「ふしづくり一本道の実践」であった。

昭和41年度

・岐阜県教育委員会研究指定校『創造性の開発をめざした「ふしづくり一本道」の実践』
・授業構造の研究
・感覚優先についての研究
・学級経営についての研究（各教科指導方針と生活指導）・学習の個別化の研究（グループ指導）
・岐阜県教科研第11回岐阜県音楽教育研究大会「楽しさの中に美しさと確かさを求めて」
・吉城郡小中学校研究授業，研究演奏公開「ふしづくりを通した音楽指導の系統化」
・創作曲集「草ぶえ」
・ふしづくり指導段階表第一次案作成

昭和42年度

・学習指導法の研究（主体性，創造性のある授業研究）
・校内指導体制の確立（学級担任全教科指導）
・ふしづくり指導段階表第二次作成案（低・中・高学年用の三本案を作成）
・ふしづくりの指導段階表第三次案作成
・県教委指定研究発表「主体性，創造性のある授業構造―ふしづくり一本道の実践をとおして―」（参観者400名）

昭和43年度

・研究主題（指導要領改正点の研究，全教科の教育課程研究）
・ふしづくり指導段階表第四次案実践研究・「和声と３拍子」系統試案作成
・音楽参観者169名

昭和44年度

・研究教科「国語」（主体的・創造的な学習態度の育成）・ふしづくりの指導段階表第四次案実践研究
・「和声と３拍子」系統試案作成
・音楽参観者357名

昭和45年度

・研究教科「国語」
・ふしづくり指導段階表第四次案実践研究
・鍵盤ハーモニカ研究実践
・音楽参観者365名

昭和46年度

・研究教科「算数」「音楽」
・ふしづくり指導段階表第五次案作成
・全国自主発表「ふしづくり実践」開催10月，全員授業公開，演奏発表（参観者1,100名）
・拡大参観日２月（参観者550名）
・本年度参観者1,990名，内地留学者８名

昭和47年度

・研究教科「算数」「音楽」
・拡大参観日６月，半数授業公開，演奏学級単位（参観者550名),10月,全員授業公開,演奏発表（参観者1,000名）
・実技講習７月（参観者113名）
・参観日２月，半数授業公開
・ふしづくり指導書作成
・本年度参観者2,382名，内地留学者５名

昭和48年度

・研究教科「算数」「音楽」
・参観日５月（参観者75名），６月（参観者387名），９月（参観者28名），11月（参観者50名），２月（参観者230名）
・拡大参観日10月（参観者950名）
・実技講習７月（県内参観者62名，県外参加者143名）・

シンガポール文部省教育視察団来校８名
・NHKテレビ全国放送　教育テレビ「教師の時間」
・本年度参観者2,002名，内地留学者６名

昭和49年度

・研究教科「算数」「音楽」
・参観日５月（参観者55名），６月（参観者450名），11月（参観者350名），２月（参観者500名）
・拡大参観日10月（参観者1,700名）
・ふしづくり講習会７月（参観者165名）
・シンガポール文部省教育視察団来校８名
・『ふしづくりの教育』発刊（３月）
・本年度参観者2,898名，内地留学者７名

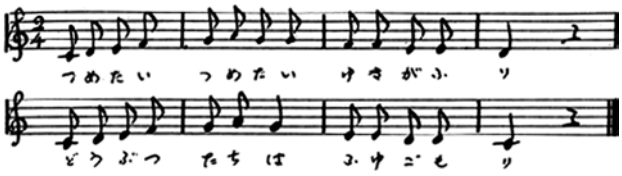
中家校長退職後，昭和50年度から３年間は山下一男校長が「ふしづくりの教育」を引き継いだ。

しかし，昭和53年度に赴任したＺ校長は，その最初の訓示で「私は，「ふしづくりの教育」を潰しに来た」と発言した。Ｚ校長は，１年ごとに1/3の教員を異動させ，３年間で，「ふしづくりの教育」に関係していた教員ほぼ全員を古川小学校から転出させたと言われている。こうして,「ふしづくりの教育」は消滅していったのである。倉庫に保管されていた「ふしづくりの教育」の資料もすべて焼却されたそうである。

Ⅷ.　『うたつくり』　２年　蔵坪雅文

この作品は，山崎の編著「ほんものの音楽教育を求めて」の中に収録された作品で，昭和46年度の児童作品である。

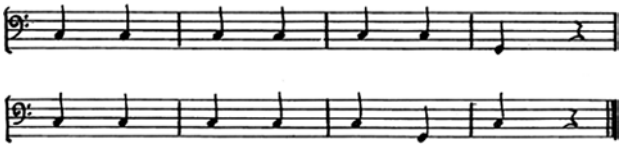
学校の帰り道に竹本君が「歌つくりをやるか」といったので，みんながさんせいしました。ぼくが「歌つくりする所を，どこにする」といったら，渡辺君が，「ぼくのうちと，蔵坪君のうちは、赤ちゃんがいるで，だめやし・・・竹本君のうちは，だめか」というと「うん，ばあちゃんが，やかましいとこわいで，だめだよ」といいました。ぼくは「まさいくんの家は遠いし・・・本光寺でやろうか」といいました。みんなもさんせいしました。はじめに，ピアニカと，しきとあう音をすることのきめました。みんなが考えていたら，だんだんさむくなってきました。竹本君が，きゅうに，えんがわを走りだして「つ



楽譜１　作曲：蔵坪雅文

めたい，つめたい，あしが」とうたいました。ぼくが「それにするか」といって，少しかえてとうたったら，「いいぞ」と，渡辺君が手をたたきました。こんどは２ばんを考えることにしました。片町君が，「それから，そそれから母ぐまが，かわいい子ぐまを，うみました」「いいうたや」と，みんなで大さわぎでした。１ばんと２ばんを，みんなでピアニカをふいたり，うたったり，ぼくのしきにあわせておぼえました。みんな，おぼえたので，３ばんを考えました。ぼくができたので，「できた！」といったら，あんまり大きい声だったので，みんなひっくりかえって，大わらいでした。「春が春が，ちかずくと，母ぐま子ぐまが出てくるよ」とうたいました。みんな，それがいいといったので，ぼくのうたにきめました。おわりに合う音をつけることにしました。

渡辺君が「できた！」といって，さっそくもとのふしに合わせてみました。



楽譜２　作曲：渡辺

とってもいい感じでした。足も手もかじかんできたので帰ることにしました。あしたの発表を楽しみにしながら・・・。

次の日発表したら，川上先生や，友だちが，とてもびっくりしてほめてくれました。みんなはなたかだかでした。みんなうたってくれました。吉野さんが「ちょっとひくいからファの音から始めて歌ったらどうですか」といってオルガンでさっそくひいてくれました。先生も「なーるほど！」といってかんしんしました。みんなでまたうたいました。野田さんが「すずやタンブリンを入れてみたら」といったので入れてみました。すばらしい曲になりました。なんども、なんども歌いました。かわいい子

ぐまと，やさしいおかあさんが春をまって出てくるような気がしました。

Ⅸ．コーナー学習を実践して
―主体性・個別化を願って―

ひとりひとりの児童が課題を持ち，それに向かって学習するところに，楽しさ，意欲があり，そこに自己実現がなされるものであると思う。児童の主体的学習と個別化を願って次のような実践をしている。

１．事前調査をする。
・児童の曲に対する姿勢をつかむ。
・音楽に対する能力，嗜好を調査。
２．事前研究をする。
・意識化を図る。
・意欲づけの方法。
３．全体の計画をたてる。
・全員の共通の場をつくる。
４．ひとりひとり計画をたてる。
・自分でやってみたいと思う学習をすることにより自分が学習するのだという気持ちをもつ。
５．児童ひとりひとりが記録をとる。
・自分が学習した内容と，様子について記入していく。
６．次の計画を立案する。
７．教師側のカルテ作り
・個人の学習と，変容について追跡調査をする。
・第２回，第３回のコーナー学習に対する教師の助言のあり方。
・全体の学習進展の動きの調査。―コーナー学習の場は，第１次の扱い（歌を覚える）はレディネスの段階と考え，意欲づけ，学習の方向の決定した後に展開するのである。しかし，毎時同じ方法の繰り返しでなく，全体学習，グループ学習，個の学習，また全体へとなるような授業を組み立てることが必要である。―
・第１回目のコーナー学習が最も意欲的である。それはいちばんやってみたいと思う学習であるからであろう。
次に予定しているコーナー学習への意欲づけに助言の場として考慮することが大切である。
・１時限の最低のめあては常に持って，子ども達がそれに到達したかどうか診断が必要である。

○（11月28日の実践記録より）
・ハーモニカ　コーナー学習（日の丸）
旋律奏のできるようになった子どもは，タタ，タッカ，ターンタンの変奏をして，他の子はリズム唱したり，３拍子は歌詞唱も入れて活動していた。

○（12月18日の実践記録より）（いたずらねずみ）
・コーナー学習では第１回目がいちばん行きたいところだから非常に意欲的である。
・司会者は別に立てず自然発生的に関わり合っていた。
・教材によって軽重をつけ，やさしいものは全員にやらせることも考えるとよい。
・何時間かけても毎日新しいことを経験し，自分で「できるようになった」と自分の評価ができるのでいきいきと活動する。

○（12月20日の実践記録より）
・音楽の授業では吹けるようにならなかった子どもが，友だちに教えてもらって吹けるようになり，「先生聴いて！」といってよろこんでいた。

○（２月４日の実践記録より）（りすの子）
・４時間の学習の中で，指揮（全員）リズム伴奏（全員）合う音（全員）旋律奏（ピアニカ，ハーモニカ，４人吹けない）
・友だち学習が盛んになった。音楽好きの子が増えてきた。

○（６月18日の実践記録より）（雨こんこん）
・１時間の授業の中で指揮，リズム伴奏，旋律奏，合う音とコーナーを回ってスタートした子 17であった。
・音楽の授業が欠けると従来は何も言わなかったのに，１学期の終わり頃になったら「先生，今日欠けた音楽はいつあるの？」と催促されるようになり，体育と音楽は欠かすことができなくなった。

表１　個人進度

べんきょう表			古川たかし
合　う　音	○		
ピ ア ニ カ	○		
リズム伴奏	○		
リ ズ ム 唱	○	○	
し　　き	○	○	
う　　た	○	○	
べんきょう ＼ 曲	日の丸	りすの子	

学級診断テスト（教材名：りすの子）

第一次コーナー（第１時）

・イメージを話し合い，歌を覚え，そのあと手拍子をとったり，フレーズをつむためのさんぽをしたり，リズム唱をしたりして，１時間の学習を展開した。

・ほとんどの児童が学習を終えた。

第二次コーナー（第２時～４時）

・簡単な曲は，１人でコーナー学習お１時間でマスターする子もいる。

・全コーナーをはやく終了した子は，階名唱コーナー，ランランコーナー（擬声伴奏）

表２　第１次コーナー

学習内容 ＼ 氏名	歌を覚える	手拍子をとる	歌のさんぽ	バトンタッチ	リズム唱
男児１	○	○	○	○	○
男児２	○	○	○	○	○
男児３	○	○	○	○	○
男児４	○	○	○	○	○
男児５	○	○	○	○	○
男児６	○	○	○	○	○
男児７	○	○	○	○	○
男児８	○	○	○	○	○
男児９	○	○	○	○	○
男児10	○	○	○	○	○
男児11	○	○	○	○	○
男児12	○	○	○	○	○
男児13	○	○	○	○	△
男児14	○	○	○	○	○
男児15	○	○	○	○	○
男児16	○	○	○	○	○
女児１	○	○	○	○	○
女児２	○	○	○	○	○
女児３	○	○	○	○	○
女児４	○	○	○	○	○
女児５	○	○	○	○	○
女児６	○	○	○	○	○
女児７	○	○	○	○	○
女児８	○	○	○	○	○
女児９	○	○	○	○	○
女児10	○	○	○	○	○
女児11	○	○	○	○	○
女児12	○	○	○	○	○
女児13	○	○	○	○	○
女児14	○	○	○	○	○
女児15	○	○	○	○	○
女児16	○	○	○	○	○
女児17	○	○	○	○	△
女児18	○	○	○	○	○
女児19	○	○	○	○	○
女児20	○	○	○	○	○
女児21	○	○	○	○	○

○→学習完了　△→学習不十分

表３　第２次コーナー

学習内容 ＼ 氏名	指揮	ピアニカ奏	ハーモニカ奏	リズム伴奏	合う音さがし
男児１	３○	２○		４○	５○
男児２	３○	２○	課外	５○	４○
男児３	４○	４○	５○	３○	２○
男児４	３○	２○	課外	５○	４○
男児５	３○	２△		４○	５○
男児６	３○	２○	３○	４○	５○
男児７	３○	５○	４△	２○	４○
男児８	３○	５△	４△	４○	２○

男児９	４○	３○	５○	課外	２○
男児10	２○	４○	４△	３○	５○
男児11	４○	５○	４○	２○	３○
男児12	３○	５△	４△	２○	３○
男児13	３○	課外		２○	５○
男児14	３○	４○	２○	２△	課外
男児15	５○	２○	５○	３○	４○
男児16	５○	３○	４○	課外	２○
女児１	５○	５○	２○	３○	４○
女児２	３○	４○	課外	２○	５○
女児３	４○	２△		３○	５○
女児４	４○	５○	３○	２○	５○
女児５	５○	３△	３○	２○	４○
女児６	４○	４○	３○	４○	２○
女児７	４○	４○	３○	３○	２○
女児８	３○	４○	３○	５○	２○
女児９	３○	２○	３△	５○	４○
女児10	２○		５○	４○	４○
女児11	５○	課外	３△	４○	２○
女児12	３○	課外	４△	３○	５○
女児13	４○	５○	３○	２○	４○
女児14	４○	４○	２○	３○	５○
女児15	５○	課外	３○	２○	４○
女児16	４○	４○	２○	３○	４○
女児17	２○	４△		３○	５○
女児18	２○	４○	５○	３○	４○
女児19	５○	２○	４○	２△	３○
女児20	２○	３○	５○	４○	５△
女児21	２○	３○	４○	５○	課外

２○：第２時学習完了　２△：第２時学習不十分
３○：第３時学習完了　３△：第３時学習不十分
４○：第４時学習完了　４△：第４時学習不十分
５○：第５時学習完了　５△：第２時学習不十分
課外：課外学習で完了

X.「ふしづくりの教育」の分析

山崎俊宏は自編著「ほんものの音楽教育を求めて」の中で次のように述べている。

本校（古川小学校）へ２週間に亘って内地留学をされ，「ふしづくりの教育」の研究をされた「小松英郎」先生が次のような実験的研究をされ，報告を受けました。

小学校の音楽基礎能力に関する「ふしづくりの教育」の成果について　―小松英郎―

◆実験方法

ふしづくり対象は，大津市立○○小学校において，実験学級２年Ａ組，普通学級２年Ｂ組とを用いた。

両クラスのIQ分布は次の通りである。

表４　IQ分布

クラス／男女／IQ	２年Ａ組		２年Ｂ組	
	男	女	男	女
140以上	0	1	0	3
130～140	1	0	0	0
120～130	1	6	1	0
110～120	6	4	6	4
100～110	7	5	4	7
90～100	4	4	7	5
80～90	1	0	0	0
70～80	0	0	2	1
M	109.575		105.58	
S・D	13.01		14.37	

IQの平均値について，両クラス間に有意な差はみとめられなかった。

◆手　続

２年Ａ組においては，1961年12月（当時１年生）より「ふしづくりの指揮計画表」に基づいて指揮を続け，1962年９月には10段階（続くふし，終わるふし）まで進めてきた。他方普通学級の２年Ｂ組は，従来通り教材曲のみによる指揮が続けられて来た。

◆測　定

音楽基礎の調査問題を用いた。項目は表４である。

ソノシートの問題により解答用紙に記入させた。

表５　音楽基礎能力の項目

要　素	内　　容	問題数
リ　ズ　ム	１．身体表現	10
	２．リズムフレーズ	10
メロディー	３．フレーズ感	10
	４．調 性 感	10
ハーモニー	５．和 音 感	10
	６．和声進行	10
聴　　音	７．記　　譜	10

◆結果と考察

Ａ，Ｂ二つのクラス間では，Ａ組の方が音楽基礎能力に関して，より高い傾向がみられる。

表６　１年間の２Ａ，２Ｂの音楽能力獲得比較

クラス 男女 / P.R	２年Ａ組		２年Ｂ組	
	男	女	男	女
90以上	0	1	0	0
80～90	0	3	0	2
70～80	5	8	0	7
60～70	7	8	5	0
50～60	5	1	1	6
40～50	2	1	6	3
30～40	1	1	5	2
20～30	0	0	3	0
M	60.94	69.91	44.69	60.39

「ふしづくり」の取扱い段階の初歩はリズムを中心としているので，リズムに関する内容に関しては両クラスの間に差が生じている。Ａ組の子どもたちは，和声面でも強い興味を示しておりどんな教材でも「輪唱してみよう」「合唱できる別のふしを教えてほしい」という要求をもち，時には，自分たちでくふうしてみたり，「このふしは合わない」と評価できるようになっている。とりたてて指揮していないのに「気持ちがいい」「美しい」「ぴったりしない」と判定している。

音楽が楽しくてたまらない，好きでたまらない，そして美しいものを求めるという主体的で創造的な態度が，この「ふしづくり」の営みによって培われて来たと考えられる。このように基礎的な能力ばかりでなく，学習集団形成の上にも大きな変化が表われ，他教科の学習態度や，生活態度にも少なからぬ変容がみられる。

表７　２Ａ，２Ｂ10ヶ月の音楽基礎能力の伸長比較表

テスト	２年Ａ組		２年Ｂ組	
	男	女	男	女
1	61.85	50.45	43.60	43.60
2	57.70	57.75	46.80	41.50
3	65.30	74.56	39.50	69.45
4	54.50	61.00	37.80	61.70
5	58.75	74.70	62.80	70.15
6	59.75	84.05	39.00	60.10
7	68.75	86.75	43.50	76.10

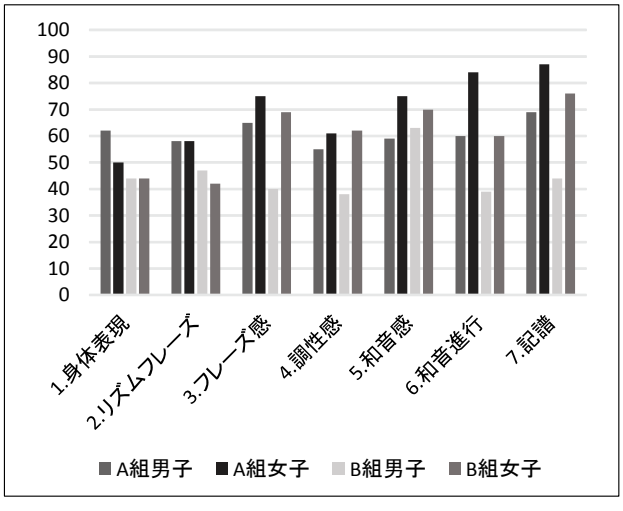


図1　２Ａ，２Ｂ10ヶ月の音楽基礎能力の伸長比較グラフ

注

1）三村真弓（2013）「広島大学大学院教育学研究科紀要　第62号」p. 348.
2）1937年，岐阜県師範学校卒業。岐阜県公立小中学校勤務を経て，岐阜県教育委員会指導主事（在職５年）を経て，岐阜県公立小中学校長を勤める。「ふしづくりの教育」指導者
3）三村真弓（2013）「広島大学大学院教育学研究科紀要　第62号」p. 348.
4）山崎俊宏（1973）「ほんものの音楽教育を求めて」p. 5.
5）山崎俊宏（1973）「ほんものの音楽教育を求めて」p. 167.
6）山崎俊宏（1973）「ほんものの音楽教育を求めて」p. 327.
7）山崎俊宏（1973）「ほんものの音楽教育を求めて」p. 276.